

湘南医療大学

ティーチング・ポートフォリオ

大学名 湘南医療大学
所 属 保健医療学部看護学科
基盤共通看護領域
名 前 稲垣朱美
作成日 2026 年 5 月 1 日

I. 教育の責任

2026 年度の担当科目は下記の通りである。

1. 担当科目

【看護学科】

1 年次生:看護基盤実習Ⅰ、ナーシングスキル学Ⅰ、ヘルスアセスメントⅠ

2 年次生:ナーシングプロセスⅠ、ナーシングスキル学Ⅱ、看護基盤実習Ⅱ

4 年次生:統合実習

2. 教育活動(学科内、大学内担当)

看護学科入試広報委員会(委員)、3 年次チューター

II. 私の理念・目的

1. 私の理念

私は、看護系大学教員として約 5 年の経験がある。教員として学生と関わる際に大切にしている教育観は 2 つある。1 つ目の教育観は、「教員は学生への教授活動を通じて学びを得ていること」である。教員は、学生に看護の基本となる知識や看護を行う上で必要となる技術や能力を教授する一方で、教員も学生から常に学びを得ているということを自覚する必要がある。つまり、学生と教員間には相互作用があり、互いに学び合う存在であると考えている。

2 つ目に大切にしている教育観は、「学生の個を尊重すること」である。時代とともに変化する学生の特徴を理解した関わりが教員には求められるが、学生の個を捉え、関わることは教育に携わる者として非常に重要であると考えている。そして、学生の思いや考えを尊重し、理解しようとする姿勢を持つことは、学生との信頼関係を構築する上で欠かすことのできない教員のあり方であると考えている。多くの学生は、思春期から青年期へ移行し、自己のアイデンティティの確立という重要な課題と向き合っている。自分自身と向き合い続けている学生が、看護の対象となる人を理解するために、疾患や治療のことに加え、その人を多面的に捉え、その人に合った看護を提供することができる看護師になるために、私は学生と真摯に向き合い、彼らが何を思い、考えているのかを理解し、彼らの未来を描く一助になれるように関わっていきたいと考えている。

2. 理念をもつに至った背景

私が教育する上で大切にしている教育観として 2 つあることを先に述べた。ここでは、私が大切にしている 2 つの教育観が形成された背景について述べたい。

まず 1 つ目の「学生と教員間には相互作用があり、互いに学び合う存在である」とする教育観が形成された経緯として、看護系大学における臨地実習指導での看護学生との関わりがある。私は、臨床で看護師としての経験を重ねた後、渡英した。2 年間のイギリス

生活を経て帰国後、これからの自分が進む方向性を検討していた際、知人の紹介で、看護系大学の実習指導を担うことになった。当時の私は、臨床でプリセプターとして新人看護師の教育の役割を担った経験はあったが、看護学生の指導経験は皆無であった。そのような私が学生指導を行うことができるかという不安を抱えながら、実習指導を担当した。実習中、学生は担当患者に対して疾患や治療、発達段階を踏まえた看護展開を行いながら、患者にとって何が最善であり、患者が希望する未来像は何かを丁寧に考え、常に患者と向き合い、看護支援方法を検討していた。その過程で学生は、迷い、悩み、そして自分の能力不足から、時には涙を流しながら常に患者が望む状態に近づけるよう主体的に実習に取り組んでいた。そのような学生の真摯な姿を目の当たりにし、看護とは対象となる人を理解することが重要であること、諦めずに向き合い続けることの大切さを再認識した。私は学生から本来の看護のあり方や、看護師としての基本的な姿勢について学ぶ機会をいただいた。この経験から、学生と教員には相互作用があり、互いに学び合っているということを理解した。そして、今では私の教育観の基盤となっている。

次に、「学生の個を尊重する」ことが形成された経緯は、これまでの看護師経験に加え、博士論文研究における取り組みと、その時の指導教員との関わりが大きく影響している。看護基礎教育課程在学中から、人は一人ひとり異なる存在であることを学び、臨床で看護師として働く際も、常に患者の個別性を考慮しながら仕事をしてきた。そして、博士論文研究を進める中で、研究参加者との関わりを通じて、改めて、人とは一人ひとり異なる存在であることを実感した。学生もまた一人ひとりが異なる存在であり、さまざまな価値観を持ち、それぞれに考えや思いを持っている。私は、教育者として学生個々が何を思い、考えているのかを理解する必要があると考える。さらに、博士後期課程において指導教員となってくださった教授は、学生である私の考えや思いに常に耳を傾け、私が目指す自己像に近づけるよう常に丁寧かつ真摯にご指導くださった。私は、彼女のように常に学生の立場を理解し、一人ひとりの思いや考えに耳を傾け、尊重することのできるような教員でありたいと強く感じた。以上が、私の 2 つ目の教育観である「学生の個を尊重する」ことが形成された経緯である。

Ⅲ. 教育の方法・戦略

1. 教授方法の概要

これまでの教員経験の中で行った教育の方法・戦略を踏まえ、本校で行いたいと考えている教育の方法・戦略について述べる。

1) 講義について

講義では、各科目で設定されている到達目標を踏まえ、目標に到達することができるよう各講義内容を検討し、設定する。すべての学生のレディネスをできるだけ同じ状態になることを目指し、事前課題に取り組んでもらった上で、講義に出席してもらう。講義中の学生の反応や講義後のミニテスト結果、リアクションペーパーを踏まえ、次に講義内容を

検討する。このように、学生の状況に合わせ、柔軟に教授方法を検討していく。

2) 演習について

演習は、机上での学習を踏まえ、技術演習などを行う。演習における学習効果が最大限となるよう、演習前に事前課題に取り組んでもらうなど、準備を行う。そして、演習中は、学生個々や学生間で考える時間を持ち、考えた理由や根拠について問い、学生の考える力を育てていく。

3) 臨地実習について

臨地実習は、看護学生にとって重要な学びの機会となる。学生は、臨床の場に赴き、1名の患者を受け持ち、情報収集を通じて受け持ち患者の疾患・治療法を知り、学習を重ね、患者に必要な看護について検討する。この一連の看護展開を通じて、学生に看護職者としての倫理観や解剖生理・病態・看護学を網羅した学習の必要性を理解してもらい、学習を深めていくことができるよう関わっていく。

IV. 学習成果

前任校では、講義後、学生に講義内容等に対する感想や疑問など、自由に記載してもらいリアクションペーパーから講義を通じて具体的な学びを得ることができたというポジティブ・フィードバックを得た。また、臨地実習においても、学生から当該分野への興味が高まった、大学卒業後は当該領域で働きたいといった声をもらうことができた。

また、臨地実習では、講義で使用した資料をもとに適宜、指導を行い、机上での学びが臨床の場における学びに転換されるような指導を心がけた。

V. 改善のための努力

前任校では、がん看護学領域を主に担当していた。本校では、看護の基盤となる「基盤共通看護領域」の講師として着任した。本領域で目指す学生のあり方について理解し、講師として自分にできることや期待されていることを常に考えながら教員として成長することができるよう努力を重ねていきたい。具体的に行うこととして、次の3つを挙げる。

1. 講義では、担当科目を持ち、事前課題・小テストの作成から講義を行い、事後に小テストを行うといった一連の流れにそって実施する。
2. 演習では、机上での学習が実践に繋がるよう具体的な指導を行う。また、担当科目を持った際は、講義と演習が繋がるような授業になるよう検討する。
3. 臨地実習では、学生が多くの学びを得ることができるよう学生一人ひとりと丁寧に関わる。慣れない環境に過緊張になる学生には、不安を軽減できるような関わりをする。そして、臨床の場において遭遇した現象が看護とどのように結びつくのかを理解できるような指導を心がける。

VI. 今後の目標

今年度 4 月に本校の看護学科、基盤共通看護領域に講師として着任したこともあり、1 日でも早く新しい環境に慣れ、自身に期待される役割を担うことができるよう主体的に取り組んでいく。